

村上春樹文學中的〈淳平物語〉  
—從「日日移動的腎形石」到「蜂蜜派」—

葉菱

淡江大學日本語文學系副教授

摘要

村上春樹的「蜂蜜派」收錄在 2000 年出版《神的孩子都在跳舞》；「日日移動的腎形石」收錄在 2005 年的《東京奇譚集》。兩篇小說的共同點是同樣叫做「淳平」的主角。

如果把兩篇作品中的「淳平」當成同一個角色來解讀〈淳平物語〉，可以發現圍繞著「三個女人」淳平日漸成長。5 年後出刊的「日日移動的腎形石」補足了「蜂蜜派」的內容。

兩個作品的主題從「怪異譚」到「震災」，這樣的變化可以看出淳平成長的軌跡。以「三個女人」為故事主軸的〈淳平物語〉描繪了接受「兩個女人」，對「兩個女人」負責任的淳平的成長過程。

關鍵詞：淳平、怪異譚、震災、三個女人、成長

受理日期：2023 年 08 月 28 日

通過日期：2023 年 10 月 20 日

DOI：10.29758/TWRYJYSB.202312\_(41).0008

**<The story of Junpei> in Haruki Murakami's literature :  
From "The Kidney-Shaped Stone That Moves Every Day" to  
"Honey Pie"**

Yeh, Ling

Associate Professor, Department of Japanese, Tamkang University

**Abstract**

The common point between "Honey Pie" and "The Kidney-Shaped Stone That Moves Every Day" is the main character of the same name, Junpei. If you decipher the <The story of Junpei> with Junpei, the main character of the two works, as the same person, the growth of Junpei over the "Three Women" theory is present. The "The Kidney-Shaped Stone That Moves Every Day" published five years later is thought to play a complementary role in "Honey Pie".

The change of the motif from "Monster Story" to "Earthquake" is regarded as the trajectory of Junpei's growth. It can be said that < The story of Junpei> centered on the "Three Women" theory depicts the growth of Junpei, who accepts "Two Women" and tries to fulfill his responsibility for "Two Women".

Keywords: Junpei, Monster Story, Earthquake, Three Women, Growth

村上春樹文学における〈淳平の物語〉  
—「日々移動する腎臓のかたちをした石」から「蜂蜜パイ」へ—

葉菱

淡江大学日本語文学科准教授

要旨

村上春樹の「蜂蜜パイ」は『神の子どもたちはみな踊る』（2000年・新潮社）に収録された短編小説であり、「日々移動する腎臓のかたちをした石」は『東京奇譚集』（2005年・新潮社）に収録された短編小説である。二つの作品の共通点として、淳平という同名の主人公が登場することが挙げられる。

二作の主人公である淳平を同一人物とした〈淳平の物語〉を解読すると、「三人の女」説をめぐる淳平の成長は現前する。5年後に上梓された「日々移動する腎臓のかたちをした石」は、「蜂蜜パイ」を補完する役割を果たすと考えられる。

また、「怪異譚」から「震災」へというモチーフの変化は、淳平の成長の軌跡だと看做される。「三人の女」説を中心とした〈淳平の物語〉は、「二人の女」を受容し「二人の女」への責任を果たそうとする淳平の成長を描くものだと言えよう。

キーワード：淳平、怪異譚、震災、三人の女、成長

村上春樹文学における〈淳平の物語〉  
— 「日々移動する腎臓のかたちをした石」から「蜂蜜パイ」へ—

葉菱

淡江大学日本語文学科准教授

1. はじめに

村上春樹の「蜂蜜パイ」は『神の子どもたちはみな踊る』（2000年・新潮社）に収録された短編小説であり、主人公である小説家の淳平に視点が置かれた作品である。一方、『東京奇譚集』（2005年・新潮社）に収録された「日々移動する腎臓のかたちをした石」（以下では「日々移動」と称す）には設定が極めて類似した淳平という同名の主人公が登場する。

「蜂蜜パイ」において、「30歳になる前に淳平は二冊の短篇小説集を出した」（『神』p.177）、「五年のあいだに合計で四度、芥川賞の候補になった」（『神』p.176）とあるように、小説家である淳平の履歴は「2冊の短篇小説集」、「4回の芥川賞候補」と具体的に語られている。

一方、「日々移動」において、「何冊くらい本を出しているの？」と聞かれた淳平は、「短編集が二冊」（『東』p.127）と返事する。また、「芥川賞の候補になったことってある？」という質問に対して、淳平は「五年間で四回」（『東』p.128）と答える。このように、淳平の小説家としての履歴をめぐって、「蜂蜜パイ」と「日々移動」とは一致している。

主人公の設定における類似性から、「日々移動」を「蜂蜜パイ」の〈前日譚〉として論考を展開する先行研究は多く見られる。例えば、ジェイ・ルービンは『日々移動する腎臓のかたちをした石』は、『蜂

蜜パイ』の続編——というか前編——だ」<sup>1</sup>と述べている。津田保夫は「『日々移動する腎臓のかたちをした石』は、『蜂蜜パイ』と同じく小説家の淳平が主人公であるが、その五年前の三十一歳のときの出来事という設定になっている」<sup>2</sup>と説明している。大谷哲は「(前略)『蜂蜜パイ』である。5年後に発表となる前日譚『日々移動する腎臓のかたちをした石』で、その作品世界はさらに広げられることになる」<sup>3</sup>と論じている。

このように、「日々移動」は5年前に上梓された「蜂蜜パイ」の直接的な続編だと村上春樹が明言していないにも関わらず、先行研究で示されたように、〈前日譚〉という視点で両作品を解読するのは、作品の理解を深めるための有効的な手段の一つだと分かる。こうして、「日々移動」を「蜂蜜パイ」の〈前日譚〉と看做し〈淳平の物語〉を考察するのは、2000年代の村上春樹文学における連続性を解明すると考えられる。

また、『神の子どもたちはみな踊る』の創作経緯について、村上春樹は以下のように説明している。

これらの六編の短編小説においては 1995年2月に起こった出来事が描かれている。ご存じのように、1995年1月に神戸の大地震があり、同じ年の3月には地下鉄サリン事件が起こった。

(中略) 原理的に言えば、そのふたつのあいだには大きな違いがある。しかしその両者は決して無縁のものではない。(中略) 執拗なまでの「地下性」は、僕にはただの偶然の一致とは思えなかった。(下線は筆者によるもの、以下同じ)<sup>4</sup>

---

<sup>1</sup> ジェイ・ルービン著、畔柳和代訳 (2006)『ハルキ・ムラカミと言葉の音楽』新潮社 p.379

<sup>2</sup> 津田保夫 (2015)「村上春樹の短編小説におけるミザナビーム手法」『言語文化共同研究プロジェクト2014』大阪大学大学院言語文化研究科 p.28

<sup>3</sup> 大谷哲 (2021)「村上春樹『ファミリー・アフェア』の〈転換〉から—『蜂蜜パイ』の〈家族〉までの距離と意義へ—」『東京都立産業技術高等専門学校研究紀要』(15) 東京都立産業技術高等専門学校 p.29

<sup>4</sup> 村上春樹(2003)「解題」『村上春樹全作品 1990~2000③ 短篇集Ⅱ』講談社 pp.268-270

「蜂蜜パイ」を含め『神の子どもたちはみな踊る』に収録された短編小説は、いずれも「神戸の大地震」と「地下鉄サリン事件」に挟まれた「1995年2月」を舞台にされている。自然現象と人為的な犯罪との間に「大きな違い」があると理解したものの、村上春樹は両者における「地下性」を「偶然の一致」を超えたものとしている。一方、『東京奇譚集』に収録された「偶然の旅人」には「偶然の一致」に関する箇所が見られる。

偶然の一致というのは、ひょっとして実はとてもありふれた現象なんじゃないだろうか。(中略)でもその大半は僕らの目にとまることなく、そのまま見過ごされてしまいます。(『東』p.41)

村上春樹が言う「地下性」の概念と同様に、5年後に発表された「日々移動」の主人公が、「蜂蜜パイ」における淳平に極めて類似したと設定されたことは、「偶然の一致」というありふれた現象を超えた、見過ごせない何かが存在していると考えられるのではなかろうか。

本稿では、二作品の主人公である淳平を同一人物として、〈淳平〉をめぐった、一つのまとまった物語という視点で、「蜂蜜パイ」と「日々移動」との繋がりを解読してみよう。

## 2. 「三人の女」説をめぐり 〈淳平の物語〉

2000年の「蜂蜜パイ」は、「淳平は36歳、兵庫県の西宮市に生まれそこで育った」(『神』p.167)とあるように、淳平が36歳の時点の話が中心となっている。それに、小夜子、高槻などの友人との大学時代からのエピソード、小夜子の娘である4歳の沙羅に話した「熊のまさきち」の話は挿入されている。

一方、2005年の「日々移動」は、「淳平は三十一歳だ」(『東』p.126)

どのように、31歳の淳平を中心にした作品である。主な内容として、青年期に父親に教わった「三人の女」の話、キリエという女性との付き合い、淳平が書いた小説「日々移動する腎臓のかたちをした石」（『東』p.148）は語られている。

前述したように、本稿では両作品の淳平を同一人物と見做すため、本節では淳平の年齢を手がかりにして、時間順で両作品を織り上げた〈淳平の物語〉を探る。

「十六歳のとき」（『東』p.123）、淳平は「親しく膝を交えて話をするよううちとけた間柄ではなかった」（『東』p.123）父親に「男が一生に出会う中で、本当に意味を持つ女は三人しかいない」（『東』p.123）という「『三人の女』説」（『東』p.126）を教わる。「強迫観念」（『東』p.126）となった「三人の女」説にまどわれて、女性との深い関係を避ける。

「十八歳のときに家を離れ、東京の大学に」（『東』p.124）入った淳平は、「『本当に意味を持つ』女性」（『東』p.124）に出会った。しかし、「彼のいちばんの親友と結婚してしまった。今ではもう母親になっている。だから彼女は、人生の選択肢からひとまず除外されなくてはならなかった。（中略）あと二人になった」（『東』p.124）と語られるように、淳平は「彼女」を「本当に意味を持つ女性」の一人目にした。

「日々移動」では「彼女」の名前は明らかにされていない。一方、「蜂蜜パイ」において、淳平は大学で出会った小夜子を「彼女こそ自分が探し求めていた女性」（『神』p.170）と確信したという記述が見られる。さらに、「高槻は希望どおり一流の新聞社に就職を決めた。（中略）小夜子は、これも希望どおり大学院に進んだ。卒業して半年後に二人は結婚した。（中略）30歳を過ぎてまもなく小夜子は妊娠した」（『神』pp.179-180）という描写は「日々移動」の「彼女」と一致している。このように、淳平にとっての「本当に意味を持つ女性」の一人目は小夜子だと看做されよう。

そして、「そのとき知り合った女性は、彼より年上だった。三十六

歳。淳平は三十一歳だ」(『東』 p.126)、「彼女は名前を名乗った。キリエといった」(『東』 p.129)とあるように、キリエに出会ったのは、淳平が31歳のときである。それから、淳平とキリエとの一連の出来事は下記の通りである。

例 1 キリエから連絡がくるのを待っていた。しかし連絡はなかった。そのようにして一ヶ月が経過した。一ヶ月が二ヶ月になり、二ヶ月が三ヶ月になった。季節は冬に変わり、やがて新しい年が訪れた。彼の書いた短編小説は文芸誌の二月号に掲載された。(『東』 p.148)

例 2 淳平がキリエに再び巡りあったのは、春の初めの昼下がりだった。いや、正確に言えば巡りあったというのではない。彼はキリエの声を聞いたのだ。(『東』 p.149)

例 3 その半年のあいだに、彼は集中的に多くの短編小説を書いた。  
(中略)その年が終わりに近づくところ、淳平は心を決めた。彼女を二人目にしよう。キリエは彼にとって『本当に意味を持つ』女性の一人だったのだ。(『東』 p.155)

例 1 の「新しい年」、例 2 の「春の初め」、例 3 の「その年が終わり」から分かるように、キリエと連絡が取れなくなって、彼女を「本当に意味を持つ女性」の二人目にしたのは、淳平がキリエに出会った翌年で、つまり淳平が32歳のときだと考えられる。

続いて、「高槻と小夜子の関係が破局を迎えていることを知ったのは、沙羅が二歳の誕生日を迎える少し前だった。(中略) 数カ月後、小夜子と高槻は正式に離婚した。(中略) 俺はまだ33になったばかりなのに」(『神』 pp.183-184)という記述から見ると、小夜子の離婚は淳平が33歳のときである。そして、そのとき沙羅が2歳になったと考えられる。そうすると、淳平と沙羅との年齢の差は31歳だと推定される。

一方、「神戸の地震のニュース」は「4歳の女の子には刺激が強過

きた」(『神』p166) と思う淳平は「36歳」(『神』p.166) である。この場合、淳平と沙羅との年齢の差は32歳である。つまり、「蜂蜜パイ」において、淳平の年齢をめぐって齟齬が生じるように見える。

解釈の一つとして、「淳平が1月生まれで、沙羅が3月生まれ」とすれば、「神戸の地震のニュース」が流れる「蜂蜜パイ」の舞台とした「1995年2月」は、沙羅の「5歳の誕生日の1ヶ月前」だと説明される。この時点において、二人の年齢の差が32歳というのは合理的であろう。

この解釈を敷衍してみると、高槻が「どうだい、小夜子と一緒にするのはいやか？(中略)小夜子と結婚するのは嫌なのか？」(『神』pp.185-186) と聞いた「一月の夜」(『神』p.185) は、小夜子が離婚した翌年で、淳平が34歳のときだと看做されよう。

また、「二人が離婚して二年が過ぎた。(中略)小夜子に結婚を申し込むことについて、淳平は真剣に考え続けた」(『神』pp.187-188) というのは、淳平が35歳のときであろう。そして、「彼は迷い続けた。結論は出なかった。そして地震がやってきた」(『神』p.189) のは、淳平が36歳になったときだと考えられる。

「蜂蜜パイ」の最後、「神戸の地震のニュースを見すぎたせい」(『神』p.166) で「地震のおじさんがやって」(『神』p.198) きたという悪夢を見て夜中に起きた沙羅の姿を見た淳平は「夜が明けて小夜子が目を覚ましたら、すぐに結婚を申し込もう。(中略)二人の女を護らなくてはならない」(『神』p.201) と思って、小夜子との結婚を決心したのである。これは「蜂蜜パイ」の舞台とした「1995年2月」で、淳平が36歳のときであろう。

以上のように、〈淳平の物語〉は、「日々移動」における、16歳のときに父親に教わった「三人の女」説から始まったもので、「蜂蜜パイ」における、36歳のときに小夜子との結婚を決心した場面で終わるものだと考えられる。換言すれば、〈淳平の物語〉は「三人の女」説をめぐる20年間を中心としたものだと言えよう。「三人の女」説をめぐる〈淳平の物語〉を次のようにまとめた。

表 1 「三人の女」説をめぐる〈淳平の物語〉

| 淳平の年齢 | 「三人の女」説をめぐる出来事  | 言及する作品        |
|-------|-----------------|---------------|
| 16 歳  | 父親に「三人の女」説      | 「日々移動」        |
| 18 歳  | 小夜子との出会い        | 「蜂蜜パイ」        |
|       | 小夜子を「一人目」と認識    | 「蜂蜜パイ」、「日々移動」 |
| 29 歳  | 小夜子と高槻との結婚      | 「蜂蜜パイ」        |
| 30 歳  | 小夜子の妊娠          | 「蜂蜜パイ」        |
| 31 歳  | 小夜子の出産＝沙羅の誕生    | 「蜂蜜パイ」        |
|       | キリエとの出会い        | 「日々移動」        |
| 32 歳  | キリエを「二人目」と認識    | 「日々移動」        |
| 33 歳  | 小夜子と高槻との離婚      | 「蜂蜜パイ」        |
| 34 歳  | 高槻に小夜子との結婚を聞かれる | 「蜂蜜パイ」        |
| 35 歳  | 小夜子との結婚を考え続ける   | 「蜂蜜パイ」        |
| 36 歳  | 小夜子との結婚に迷い続ける   | 「蜂蜜パイ」        |
|       | 地震の発生           |               |
|       | 小夜子との結婚を決心      |               |

表 1 から分かるように、小夜子を中心とした「蜂蜜パイ」と、キリエをめぐる「日々移動」との共通項は、小夜子と「三人の女」説を結びつけることだと考えられる。さらに言えば、5 年後に上梓された「日々移動」は、「蜂蜜パイ」における淳平の小夜子への気持ちを補完する役割を果たすのであろう。

### 3. 「怪異譚」から「震災」へ

村上春樹は短編小説の創作について、次のように述べている。

作品のグループにそれなりの一貫性や繋がりを与えられるこ

とだ。(中略) 特定のテーマなりモチーフを設定し、コンセプト  
ジュアルに作品群を並べていくことができる。(中略)『神の子ど  
もたちはみな踊る』の場合のモチーフは「一九九五年の神戸の  
震災」だったし、『東京奇譚集』の場合は「都市生活者を巡る怪  
異譚」だった。<sup>5</sup>

引用文のように、『神の子どもたちはみな踊る』に収録された「蜂  
蜜パイ」のモチーフは「震災」で、『東京奇譚集』に収録された「日々  
移動」のは「怪異譚」である。こうして、「日々移動」から始まって  
「蜂蜜パイ」で終わる〈淳平の物語〉のモチーフは、「怪異譚」から  
「震災」へと変化するものであろう。

『東京奇譚集』の「怪異譚」について、ジェイ・ルービンは「そ  
うした超自然的な力は登場人物たちが心理面で求めていることのメ  
タファーとなり、連作の主題、つまり心の癒しへの入り口をもたら  
している」<sup>6</sup>と論じている。「父親の呪い」(『東』 p.125) という言葉  
が使われるように、「日々移動」の場合、淳平が求める「心の癒し」  
は、父親が課せられた「強迫観念」である「三人の女」説からの解  
放だと考えられる。そして、淳平が「心の癒し」を手に入れた場面  
は次の通りである。

淳平は心を決めた。彼女を二人目にしよう。キリエは彼にと  
って「本当に意味を持つ」女性の一人だったのだ。ストライク・  
ツー。残りはおと一人ということになる。しかし彼の中にはも  
う恐怖はない。大事なものは数じゃない。カウントダウンには何  
の意味もない。大事なものは誰か一人をそっくり受容しようとい  
う気持ちなんだ、と彼は理解する。(『東』 p.155)

---

<sup>5</sup> 村上春樹 (2014) 「まえがき」『女のいない男たち』文藝春秋 p.6

<sup>6</sup> ジェイ・ルービン著、畔柳和代訳 (2006) 『ハルキ・ムラカミと言葉の音楽』  
新潮社 p.377

引用文のように、淳平は「三人の女」という女性の数をカウントダウンするのが無意味のことだと理解する。それは、父親の「三人の女」説という「強迫観念」から解放されたことであろう。こうして、「日々移動」の「怪異譚」がもたらした「心の癒しへの入り口」は、淳平のキリエとの出会いだと考えられる。

「キリエにふられた自分を共に『受容』することで、次なるステップに踏みだそうとするのである」<sup>7</sup>と論じられるように、キリエを「本当に意味を持つ女性」の二人目として受容した淳平は、「限られた数のカードを人生の早い段階で使い切ってしまうことに、怯えもした」(『東』p.124) という過去の自分と決別したのでであろう。しかし、「もちろん淳平は小夜子を愛している。疑問の余地はない」(『神』p.189) とあるように、淳平は依然として小夜子への愛情を抱く一方、小夜子に結婚を申し込む決心をした36歳まで「迷い続けた」(『神』p.189) のである。

淳平が小夜子を「本当に意味を持つ女性」の一人目と確信するというのは「強迫観念」による結果だと見做されよう。カウントダウンの意味の無さを理解し「強迫観念」から解放されたものの、淳平は地震が起こるまで小夜子との結婚に迷い続ける。その理由について、津田保夫は以下のように説明している。

ここまでの彼の行動はデタッチメントに基づいているといえるだろう。そして、そこへ地震が起こり、コミットメントへと向かい始める。<sup>8</sup>

津田氏の説明によると、小夜子との結婚を決断できないのは、淳平のデタッチメントに基づく行動パターンによる結果である。そし

---

<sup>7</sup> 重岡徹 (2006) 「村上春樹『東京奇譚集』論」『別府大学国語国文学』(48) 別府大学国語国文学会 p.31

<sup>8</sup> 津田保夫 (2016) 「村上春樹の短編小説集『神の子どもたちはみな踊る』—デタッチメントからコミットメント—」『言語文化共同研究プロジェクト 2015』大阪大学大学院言語文化研究科 p.29

て、地震は淳平がコミットメントへ向かうきっかけとなる。勿論、「蜂蜜パイ」を単独に分析すると、淳平のコミットメントは「地震」によるものだという解釈は妥当である。

但し、〈淳平の物語〉という視点で考察を行うと、大谷哲が「父の呪縛からの解放の自覚に先立つ形でキリエとの『コミットメント』あるいは『愛の行為』の結実として作中作『腎臓石』は完成していた」<sup>9</sup>と論じるように、キリエを受容した時点から淳平の行動が既にコミットメントに移行したと看做されよう。すなわち、〈淳平の物語〉における「怪異譚」は、父親に「強迫観念」が植え付けられた自分と決別して、他者を受容し他者とコミットすることが可能になったという淳平の変化をもたらす働きが見られる。

一方、「震災」というモチーフについて、松島雄大は次のように解釈している。

地震は登場人物の心的な「痛み」の比喩であり、それを契機として登場人物に不可逆的変化を引き起こす効果をもっているのである。地震の起こす「不可逆的変化」とは、個人の内部における「価値観」や「理念」といった言葉で言い表されるものの喪失あるいは転換である。<sup>10</sup>

松島氏の解釈によると、「震災」をモチーフにした『神の子どもたちはみな踊る』では、「地震」は登場人物の心的な「痛み」の表現であり、登場人物の「価値観」や「理念」を転換するきっかけでもある。「蜂蜜パイ」において、淳平の心的な「痛み」は以下のように語られている。

---

<sup>9</sup> 大谷哲（2021）「村上春樹『ファミリー・アフェア』の〈転換〉から—『蜂蜜パイ』の〈家族〉までの距離と意義へ—」『東京都立産業技術高等専門学校研究紀要』（15）東京都立産業技術高等専門学校 p.17

<sup>10</sup> 松島雄大（2016）「村上春樹『UFOが釧路に降りる』論」『山口国文』（39）山口大学人文学部国語国文学会 p.26

地震の話題が出ると、口をつぐんだ。それは遙か昔に葬り去った過去からの響きだった。大学を出て以来その街に足を踏み入れたことすらない。にも関わらず、画面に映し出された荒廃の風景は、彼の内奥に隠されていた傷あとを生々しく露呈させた。(中略)淳平はこれまでにない深い孤絶を感じた。(『神』p.190)

震災の画面に感じた「内奥に隠されていた傷あと」や「深い孤絶」は、淳平の心的な「痛み」であろう。大学を出て以来故郷に戻ったことがないのは、「両親と淳平とのあいだの確執はあまりにも深く、長く続いていたので、そこにはもう回復の可能性は見あたらなくなっていた」(『神』 p.189) という両親との確執によるものだと考えられる。このように、「震災」によって表現された、淳平の心的な「痛み」は、親子関係に関わるものだと言えよう。

「蜂蜜パイ」における親子関係について、加藤典洋は以下のように論じている。

前者(『神の子どもたちはみな踊る』に収録された他の短編小説・筆者注)に色濃くあった「父なるもの」への憎悪との向き合いとそれからの回復という主題系が、まるで嵐が過ぎた次の日の海面のように、影をひそめているということだろう。自分の中に自分の敵がいるという二重性も、もう姿をひそめている。

(中略)その再生の物語は、肝腎の「父なるもの」への憎悪という主題をそっくり割り貫いて、ややスマートすぎる形に語られている。<sup>11</sup>

加藤氏が論じたように、『神の子どもたちはみな踊る』に収録された六つの短編小説に〈「父なるもの」への憎悪〉という主題は読み取れる。そして、その憎悪に向き合って、回復した主人公の姿が描か

---

<sup>11</sup> 加藤典洋 (2004) 『村上春樹イエローページ PART2』荒地出版社 pp.138-139

れた他の五編と比べて、「蜂蜜パイ」ではその過程が十分に描写されず〈「父なるもの」への憎悪〉がスマートに消えたという。

〈淳平の物語〉の角度から見ると、淳平の〈「父なるもの」への憎悪〉の消失が「蜂蜜パイ」で描かれていないのは、「日々移動」で既に「父親の呪い」から解放されたからであろう。要するに、「蜂蜜パイ」で描ききれなかった親子関係は、5年後に上梓された「日々移動」によって補完されていると言えよう。

そして、「震災」がきっかけとして、小夜子との結婚を決心したという「理念」の転換について、大谷哲は以下のように述べている。

結婚の申し出に踏み切る淳平の「決心」とは、長く続いた煩悶、懊悩からこうした自己規定、自己理解に至るまでのプロセスを辿った末のことである。(中略)こうした意味で「蜂蜜パイ」とは、淳平が自らを「限定し、承認してみせる」＝「父」となる物語であると言えるだろう。<sup>12</sup>

引用文のように、淳平が転換した「理念」は「父となる」ことだと考えられる。「小夜子を愛している」(『神』p.189) 淳平が小夜子との結婚を「迷い続けた」(『神』p.189)のは、高槻に言われた「お前以外の誰にも、沙羅の父親になってほしくない」(『神』p.185)ということに関わるのではなかろうか。「父なるもの」への憎悪が消えたとしても、沙羅の父親になる準備ができていないのは、淳平が小夜子との結婚を迷う理由だと看做される。淳平が「二人の女を護らなくてはならない」(『神』p.201)と思うようになったのは、「大事なものは誰か一人をそっくり受容しようという気持ち」(『東』p.155)を理解した淳平が、小夜子のほかに、もう一人の女である沙羅をも受容したのであろう。このように、「震災」は淳平を「心的な痛み＝親子

---

<sup>12</sup> 大谷哲(2021)「村上春樹『ファミリー・アフェア』の〈転換〉から—『蜂蜜パイ』の〈家族〉までの距離と意義へ—」『東京都立産業技術高等専門学校研究紀要』(15) 東京都立産業技術高等専門学校 p.17

関係」に向き合わせて、「理念の転換＝父なるものとなる承認」をもたらした働きをすればよい。

以上をまとめて言えば、〈淳平の物語〉において、「怪異譚」は「父親の呪い」という自分の過去からの解放で、「震災」は「父なるもの」となる決心をもたらすものだと考えられる。16歳のとき、父親に課せられた「強迫観念」にまともわれて、常に「本当に意味を持つ」女性を求めて、女性との深い関係を避けていた淳平は、キリエとの交流で受容の意味を理解し、小夜子の夫、沙羅の父親としての責任を果たそうとする存在と成長したのである。こうして、「怪異譚」から「震災」へというモチーフの変化が織り出したのは、20年間亘った淳平の成長だと言えよう。

#### 4. 淳平の成長

前述したように、「日々移動」と「蜂蜜パイ」に綴られた〈淳平の物語〉では、「怪異譚」から「震災」へというモチーフの変化を通じて淳平の成長が観察される。本節では、淳平の成長がどのように描写されているかについて詳細に考察する。

「30歳になる前に(中略)二冊の短篇小説集を出した」(『神』p.177) 淳平に、編集者が与えたアドバイスは次の通りである。

短篇小説ばかり書きつづけていると、どうしても似たマテリアルの繰り返しになるし、小説世界もそれにあわせて痩せていく。そういうときは長篇小説を書くことによって、新しい世界がひらける場合が多い。(『神』 pp.177-178)

既に短編小説集を二冊出した淳平が創作の袋小路に陥らないようというアドバイスである。「長篇小説を書くことを何度か試み、そのたびに敗退を余儀なくされたあとで、淳平はあきらめた」(『神』p.178) という理由は以下の通りである。

物語を書くための集中力を、長い期間にわたって保つことがどうしてもできなかった。書き始めるときには素晴らしいものが書けそうな気がする。文章は生き生きとしていて、将来が約束されているように見える。物語は自然に溢れ出てくる。ところが先に進むにつれて、そのような勢いと輝きは少しずつ、しかし目に見えて失われていく。先細りになり、やがて機関車がスピードを落として停止するように、完全に消滅してしまう。

(『東』 p.137)

その結果として、「好むと好まざるとにかかわらず、短篇小説作家として生きていくしかないのだと思った。それが自分のスタイルなのだ」(『神』 p.178) と思う淳平は、「僕はもともとが短編小説の作家だよ。長編小説には向かない」(『東』 p.137) と考える一方、キリエは「もっと長い大柄な小説を書くことになると思う。そしてそれによって、もっと重みのある作家になっていくような気がする」(『東』 p.137) という。つまり、「短編小説の作家」と自認する淳平は、「勢いと輝き」、「重み」のある長編小説を書けないのである。

淳平の小説の創作方法は、「部屋に閉じこもり、ほかのすべての雑用を放り出し、孤独の中で息を詰めて三日間で第一稿を仕上げる。そのあと四日かけて完成原稿にもっていく」(『神』 p.178) と語られる。また、淳平の執筆過程は、以下のように説明されている。

彼は執筆途中の小説の内容は他人に話さないことに決めていた。それはジnkスのようなものだ。いったん言葉にして口に出してしまうと、ある種のものごとは、朝露のように消え失せてしまう。微妙な意味あいは、薄っぺらな書き割りに変わってしまう。秘密はもう秘密ではなくなってしまう。(『東』 p.141)

部屋に閉じこもって、誰にも小説の内容を話さないのは、「ある種のものごと」が消え失せないためであろう。松本和也が「部屋に閉

じこもり、自己の内奥を掘りさげることで、そこから物語を汲みとってくるという書法」<sup>13</sup>と論じるように、淳平が作品で表現しようとする「ある種のものごと」は、孤独の中で掘り下げた「自己の内奥」だと言えよう。

しかし、「淳平が書く短篇小説は、主に若い男女のあいだの報われない愛の経緯を扱っていた。結末は常に暗く、いくぶん感傷的だった。(中略)彼のスタイルは叙情的で、筋書きはどことなく古風だった」(『神』p.177)とされるように、「暗くて感情的」で「古風」と思われる淳平の短編小説には長編小説の「重み」が足りていない。言い換えれば、「孤独の中」という創作方法で「重み」を表す「自己の内奥」は十分に掘り出されていないのであろう。

一方、執筆途中の小説の内容を話さず孤独の中で創作する淳平は、「彼女になら話してもいいかもしれない」(『東』p.141)とあって、キリエに「途中までの筋書き」(『東』p.141)を話す。さらに、「彼の物語は、進行を停止していた」(『東 p.143』)という、物語の行く先を思い付かない淳平は「君はどう思う？ どうしてその石は夜のあいだに居場所を変えるんだろう？」(『東』p.143)、「腎臓石はいったいどんな意思を持つんだろう？」(『東』p.143)、「なぜ腎臓石は彼女を揺さぶりたいんだろう？」(『東』p.144)とキリエに質問を投げかけて、「彼の物語＝自己の内奥」の行く先を求めるのである。

結果として、「彼女が(あるいは彼女の中にある何か)物語を先に押し進めているのだ、と感じる」(『東』p.147)とあるように、キリエとの交流を通して、淳平は「物語の行く先＝自己の内奥」を順調に掘り下げる。要するに、キリエとのコミットメントによって、淳平は「孤独の中」で掘り出せなかった「自己の内奥」を掘り出したと言えよう。

その後、淳平が書いた作品は次の通りである。

---

<sup>13</sup> 松本和也(2014)「小説内小説の書法—村上春樹『蜂蜜パイ』から『1Q84』へ—」『ゲストハウス』臨時増刊号(6) 信州大学文学部人文学科 p.27

35歳のときに四作目の短篇集『沈黙する月』を出版し、それが中堅作家のための文学賞を受けた。表題作は映画化されることになった。小説の合間に音楽の評論集を何冊か上梓し、庭園論の本を書き、ジョン・アップダイクの短篇集を翻訳した。(『神』p.188)

二冊の短編小説集、音楽の評論集、庭園論の本を創作したり、短篇集を翻訳したりしたとしても、淳平はまだ「重み」のある長編小説を書ける作家になっていないのである。その原因は、「結局自分と真に向き合うことでは、事態の解決策はないという結論に導かれる話だ」<sup>14</sup>という宮脇俊文の論点が示唆的である。自分と真に向き合って「自己の内奥」を十分に掘り出せなければ、「重み」のある長編小説を書けるとは思えないのであろう。

淳平が「これまでとは違う小説を書こう」(『神』p.201)と思うようになったのは、「夜が明けて小夜子が目を覚ましたら、すぐに結婚を申し込もう。(中略)もう迷いはない。これ以上一刻も無駄にはできない」(『神』p.200)という、小夜子との結婚を決心した後である。

「主に若い男女のあいだの報われない愛の経緯を扱っていた。結末は常に暗く、いくぶん感傷的だった」(『神』p.177)という淳平の短編小説に対して、「夜が明けて当たりが明るくなり、その光の中で愛する人々をしっかりと抱きしめることを、誰かが夢見て待ちわびているような、その小説を」(『神』p.201)という「これまでとは違う小説」は、長編小説だと看做されよう。つまり、小夜子との結婚、及び長編小説の創作を決心したのは、自分と真に向き合った結果であろう。さらに言えば、自分と真に向き合って「自己の内奥」を深く掘り下げることができる淳平は、「重みのある作家」になる可能性を手に入れたと考えられる。

作家としての成長が見られる一方、「二人の女を護らなくてはなら

---

<sup>14</sup> 宮脇俊文(2021)「村上春樹『ハナレイ・ベイ』と戦後日本人の歴史認識」『成蹊大学経済経営論集』52(1) 成蹊大学経済経営学会 p.48

ない」(『神』 p.201) と思う淳平は、「二人の女」を受容し小夜子の夫、沙羅の父親としての責任を負うことができる存在となった。「淳平と高槻と小夜子は、大学を卒業するまで親密な三人の関係を維持した」(『神』p.175)、「高槻がクラスの中から二人をピックアップし、三人組を形成した」(『神』 p.188) とあるように、淳平と小夜子との関係は、最初に高槻が介在した「三人の関係」である。

そして、沙羅が生まれたあと、「四人」になってしまったことは、以下のように語られる。

「何はともあれ、これで俺たちは四人になった」、高槻は軽い溜息のようなものをついた。「でもどうだろう。四人というのは、はたして正しい数字なのだろうか?」(『神』 pp.182-183)

高槻は「四人の関係」に疑問を示したが、「沙羅は高槻を『パパ』と呼び、淳平を『ジュンちゃん』と呼んだ。四人は奇妙な疑似家族を作り上げた」(『神』 pp.184-185) とあるように、小夜子と離婚したあとでも「四人の関係」は続く。

地震のニュースを見すぎた沙羅のために、「久しぶりに 4 人で動物園に行こう」(『神』 p.167) と計画したが、高槻が仕事の関係で来れなくなったため、「淳平と小夜子は、沙羅をつれて三人で上野動物園に行った」(『神』 p.190) ということになる。その夜、淳平は小夜子との結婚を決心したとともに、「高槻-小夜子-淳平の三角関係」<sup>15</sup> が投影された「熊のまさきちの話」に「出口を見つけなくてはならない」(『神』 p.200) と決める。これは、高槻が介在した「三人の関係」を整理しようとする淳平の決心だと看做されよう。「沙羅はきっとその新しい結末を喜ぶだろう。おそらくは小夜子も」(『神』p.201) とあるように、自分が考えた「出口」は沙羅も小夜子も喜ぶ結末だと淳平は思う。

---

<sup>15</sup> 松本和也 (2014)「小説内小説の書法—村上春樹『蜂蜜パイ』から『1Q84』へ—」『ゲストハウス』臨時増刊号(6) 信州大学文学部人文学科 p.26

こうして、〈淳平の物語〉において、淳平の人間関係は、「淳平-高槻-小夜子」という「親密な三人の関係」から、「淳平-高槻-小夜子-沙羅」という「四人の擬似家族」になって、最後に「淳平-小夜子-沙羅」という「喜ぶ結末」に辿りつく。

一見して、キリエとの出会いは、淳平の成長に対する影響が少ないと思われる。しかし、「〈熊の話〉の即興性の萌芽は〈日々〉のキリエへの応答であろう」<sup>16</sup>という論点があるように、「熊のまさきちの話」の「出口」と比喻された高槻が介在した「三人の関係」の整理にキリエという存在は潜在しているのではなかろうか。こうして、作家としての成長がなり遂げつつある一方、淳平は「二人の女」の未来への責任を背負う存在となったと言えよう。

## 5. おわりに

本稿では「蜂蜜パイ」と「日々移動」を研究対象にして、二作品が織り出した〈淳平の物語〉を考察した。2000年の『神の子どもたちはみな踊る』は「一九九五年の神戸の震災」をモチーフとした短編小説集である。それに収録された「蜂蜜パイ」において、主人公である淳平の故郷＝神戸、そして故郷に在住の両親に対する思いは描かれている。当然ながら、「父なるもの」をめぐる淳平の葛藤も容易に読み取れるものである。しかし、「震災」と小夜子との連続性について作中には余白が残っている。また、先行研究が示したように、「父なるもの」への憎悪が消えてしまうのも唐突である。このように、前日譚の必要性は浮上してきたと思われる。

2005年の『東京奇譚集』のモチーフは「都市生活者を巡る怪異譚」である。「日々移動」では「父親の呪い」から解放された淳平が他者を受容する重要性を理解したと描写されている。こうして、二作品が織り出した〈淳平の物語〉という視点から読むと、父親に課せられた「三人の女」説をめぐる淳平の成長は現前する。

---

<sup>16</sup> 西田谷洋(2017)「創作の価値―村上春樹のエッセイとメタフィクション―」『富山大学人間発達科学部紀要』11(2) 富山大学人間発達科学部 p.109

「日々移動」を「蜂蜜パイ」の前日譚として読むと、「蜂蜜パイ」にしか登場しない小夜子を、「日々移動」にしか言及されない「三人の女」に結びつけることができる。このように、「父なるもの」を象徴する「震災」と小夜子との連続性は浮かび上がる。また、「父の呪い」からの解放をもたらす「怪異譚」から、「父なるもの」への「理念」の転換を象徴する「震災」へというモチーフの引き継ぎは、20年間亘った淳平の成長の軌跡を描くと考えられる。「三人の女」説を中心とした〈淳平の物語〉は、「二人の女」を受容し「二人の女」への責任を果たそうとする淳平の成長を描くものだと言えよう。

## 付記

本論文は、2022年12月10日に開催された「2022年度台湾日本語文学会国際学術シンポジウム」での口頭発表「村上春樹文学における未来への扉―「日々移動する腎臓のかたちをした石」と「蜂蜜パイ」を中心に―」を元に加筆・修正したものである。

## テキスト

村上春樹（2000）『神の子どもたちはみな踊る』新潮社

村上春樹（2005）『東京奇譚集』新潮社

## 参考文献

大谷哲（2021）「村上春樹『ファミリー・アフェア』の〈転換〉から―『蜂蜜パイ』の〈家族〉までの距離と意義へ―」『東京都立産業技術高等専門学校研究紀要』（15）、東京、東京都立産業技術高等専門学校 pp.16-29

加藤典洋（2004）『村上春樹イエローページ PART2』、東京、荒地出版社

ジェイ・ルービン著、畔柳和代訳（2006）『ハルキ・ムラカミと言葉の音楽』、東京、新潮社

- 重岡徹 (2006) 「村上春樹『東京奇譚集』論」『別府大学国語国文学』  
(48)、大分、別府大学国語国文学会 pp.21-35
- 津田保夫 (2015) 「村上春樹の短編小説におけるミザナビーム手法」  
『言語文化共同研究プロジェクト 2014』、大阪、大阪大学大学  
院言語文化研究科 pp.21-30
- 津田保夫 (2016) 「村上春樹の短編小説集『神の子どもたちはみな踊  
る』—データタッチメントからコミットメント—」『言語文化共同研  
究プロジェクト 2015』、大阪、大阪大学大学院言語文化研究科  
pp.21-30
- 西田谷洋 (2017) 「創作の価値—村上春樹のエッセイとメタフィクシ  
ョン—」『富山大学人間発達科学部紀要』11(2)、富山、富山大学  
人間発達科学部 pp.103-111
- 松島雄大 (2016) 「村上春樹『UFO が釧路に降りる』論」『山口国文』  
(39)、山口、山口大学人文学部国語国文学会 pp.25-33
- 松本和也 (2014) 「小説内小説の書法—村上春樹『蜂蜜パイ』から  
『1Q84』へ—」『ゲストハウス』臨時増刊号(6)、長野、信州大  
学文学部人文学科 pp.21-32
- 宮脇俊文 (2021) 「村上春樹『ハナレイ・ベイ』と戦後日本人の歴史  
認識」『成蹊大学経済経営論集』52(1)、東京、成蹊大学経済経営  
学会 pp.33-51
- 村上春樹 (2003) 「解題」『村上春樹全作品 1990~2000③短篇集Ⅱ』、  
東京、講談社 pp.268-275
- 村上春樹 (2014) 「まえがき」『女のいない男たち』、東京、文藝春秋  
pp.5-12